

## 平成22年度大学コンソーシアムとちぎ 学生活動支援事業 報告書

機 関 名	宇都宮大学 修学支援課
団 体 等 名	宇都宮チルドレン
学生代表者氏名 (所属・学年)	本間 真央 教育学部特別支援教育専攻 3年
責任教職員氏名	陣内 雄次

1. 事業名	宮チルキャンプ
2. 実施時期	平成22年7月17日(土)~18日(日)
3. 実施場所	とちぎ海浜自然の家
4. 事業の内容等	<p>本事業である宮チルキャンプは、年に一度夏に行われています。今年のキャンプには、普段宮チルに來ている小学4年生から22歳までの障害児・者17人と、学生・OB・OGのボランティア24人の計41人が参加しました。今年は、1泊2日でとちぎ海浜自然の家に行き、夏ならではの活動を行ってきました。</p> <p>1日目の主な活動は、なぎさ活動、野外調理、キャンプファイヤーです。まず、なぎさ活動では、海の浅瀬で水遊びをしたり砂浜で自由に遊びました。普段はなかなか海に入る機会も少なく、押し寄せてくる波に始めは驚いている子もいましたが、次第に波にも慣れ、とても楽しんでいる姿が見受けられました。また、砂浜で遊ぶ子達の中には、貝殻を探したり砂のお城を作ったりする子や、砂に埋まって楽しむ子もいました。次に野外調理では、夕飯のカレー作りを行いました。火をおこす係、食材を切る係に分かれ、ボランティアの力を借りながら子どもたち自身でカレーを作りました。子どもたちは慣れない包丁に苦戦しながらも丁寧に野菜を切ってくれました。また、火をおこすための薪を薪割りや、新聞を丸めたものを火の中に入れるなどの作業も子どもたちが中心となって行いました。その後、出来上がったカレーをみんなでおいしくいただきました。夜はキャンプファイヤーを行い、日ごろなかなかできない暗くなってからの皆での活動にわくわくする子どもたちの様子が伝わってきました。大きな火を囲んで音楽に合わせて自由に踊ったり、花火をして楽しみました。就寝時にはボランティアと子どもたちが同じ部屋で眠り、ボランティアにとっても就寝時まで子どもと寄り添うという貴重な体験をすることができました。日中の活動の疲れからか、子どもも大人もぐっすり眠っていたようです。</p> <p>2日目の活動は、主にプール遊びです。プールは私たちの団体が貸切で使うことができました。普段、民間のプール施設では他のお客さんもいるために活動が制限されてしまっていたのですが、今回は大型のプール遊具なども取り入れながら自由に遊ぶことができ、子どもたちはとても満足した様子でした。</p>

5. 事業の成果と今後の課題

本事業である宮チルキャンプを通して、普段の1日単位の宮チルでは行けないような遠い場所において、栃木県にはない海での活動を体験することができました。さらには親と離れた環境で2日間を過ごすことにより、子ども同士や子どもたちとボランティアの間によりいっそうの信頼関係を築くことができました。

個々の活動では、次のような成果が得られました。

- ・ なぎさ活動…とちぎ海浜自然の家の職員さんの指示のもと十分に安全を確保しながら、海の波や砂浜に親しむとともに、子ども同士やボランティアと楽しく活動することができました。
- ・ 野外調理・夕食…薪わり、火おこし、調理などの仕事を子ども同士・ボランティアと分担・協力して行い、楽しくカレーを作ることができました。
- ・ キャンプファイヤー…キャンプファイヤーを囲んで花火やジェンカを楽しみ、仲間たちとの交流を深めることができました。
- ・ プール活動…温水プールを利用して、水の中で自由に体を動かす楽しさを体験することができました。

以上のように、子どもが学校や家庭では体験できないような「遊び」を仲間たちと共有することで、充実したキャンプにすることができました。今年のキャンプは一日目・二日目共に晴天に恵まれ、子どもたちは外では活動を思いっきり楽しむことができたようです。このような活動にすることができたのも、「大学コンソーシアムとちぎ」さんに頂いた補助があつてこそだと感じます。今回頂いた補助は、移動のためのバス代として使わせていただきました。移動のバスの中でも、子どもたちやボランティアはとちぎ海浜自然の家への到着を心待ちにし、楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

今後の課題としては、家庭やボランティアの負担を増やさずに、いかに活動費をまかなうかを考えていくことです。これまでと同様に、ボランティアでフリーマーケットに参加して資金を得るとともに、今後は大きく2つの方法を考えています。ひとつは、来年度からサークル登録をすることにより補助金をもらうことです。もうひとつが、新たに始めた「宮ちる米」の販売です。私たちは、今年度から農業生産法人の協力により、鹿沼市にある田んぼを借りてお米作りを始めました。5月には、子どもたち自らが手作業で田植えを行い、10月には、育った稲を刈りにいきました。その時に収穫したお米をオリジナルの袋につめて、12月から販売を始めました。来年度以降も、米作り・米の販売を継続して、活動費にあてていこうと考えています。